

社会学——主要潮流、課題、手法（Ⅱ）

テオドール・ガイガー

梅村 麦生（訳）

〔訳者解題〕

本稿はアルフレート・フィーアカント編（1931）『社会学辞典』に収録されている「社会学」項目の第一部、テオドール・ガイガーによる執筆部分「主要潮流、課題、手法」第Ⅱ節の翻訳である。

ガイガー（Theodor Geiger, 1891-1952）はドイツ・ミュンヘン生まれの社会学者で、法社会学や家族社会学、テオドール・リットらの影響を受けた現象学的社会学に始まり、他にも階層研究や階級社会論、知識人論やイデオロギー論など、多様な分野で著作を残している。特にナチス政権成立後にデンマークに逃れて以降は、北欧諸国での社会学の確立にも大きく貢献した。初期の革命社会学研究や社会民主主義の主張、またデンマークやスウェーデンに渡った後に北欧リアリズム法学を摂取して提唱した「実践的価値ニヒリズム」や「知的ヒューマニズム」の思想によって、「戦闘的ヒューマニスト」（ルネ・ケーニヒ）としての側面も知られている¹⁾。

ガイガーのこの論考が収録されているフィーアカント編『社会学辞典』（*Handwörterbuch der Soziologie*）は、ヴァイマル共和国下のドイツ社会学による集大成の一つとも目されている²⁾。現に当時、国際的にも広く参照されており、またナチス体制の成立による終焉と戦後の復興によって大きく様変わりしたドイツ社会学の記念誌的作品ともなっている。同辞典の中でガイガーは他に「共同体」「社会」「指導」「革命」の項目を執筆しており、主要著者の一人であった。

以下、注はすべて訳者による。本編の末尾に付されている文献紹介は、著者名以下の書誌情報について適宜訳者が補い、文献紹介と分けて一覧にまとめた。他に本文中で言及のあった文献も、その一覧に含めている。

なお、原著Ⅰ節の翻訳にあたる（Ⅰ）は、別稿（日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』101号、2021年2月刊行予定）で公開する予定である。

〔テキスト〕

Theodor Geiger, 1931, »Soziologie: I. Hauptrichtungen, Aufgaben, Verfahren«, Alfred Vierkandt (Hg.), *Handwörterbuch der Soziologie*, Stuttgart: Ferdinand Enke, S.568-578 (本稿S.573-578, II.)

〔翻訳〕

目次

I 主要潮流〔別稿（I）に訳出〕

1. 社会哲学
2. 唯物的歴史哲学
3. 社会学主義
4. 個別科学的経験社会学

II 個別科学的経験社会学〔以下、本稿〕

1. 対象
2. 課題
 - a) 中心課題
 - b) 二次課題——「社会」の社会学
 - c) 文化社会学
 - d) 歴史社会学
 - e) 一般社会学
 - f) 実践社会学

文献紹介

II 個別科学的経験社会学 (Einzelwissenschaftliche empirische Soziologie)³⁾

研究史的に見れば、近年の社会学は多くの源流をもっている。今日の社会学への熱心な取り組みも、起源としてはさまざまな認識領域に由来し、新しい研究領域へのたがいに異なる関心に導かれ、さまざまな思考方法、思想教育、事実認識をもたらしている。現在の状況から見える社会学の特徴は、部分的にはその点から説明できる。つまり、研究の非連続性が目立つ、ということである——ある研究者がシャベルを当てて掘り起こしたところに別の研究者が建物を築く、ということがあまりにも少ない。異なる手法が並立しているか、あるいは混ざり合っている。研究の対象と課題に関する見解が分かれていることが、(少なくともドイツの)社会学における整理統合の欠如という訴えに根拠を与えている。この欠如はゆるやかに解消されていく——そのことを示す兆候は増えており、本辞典のような共同研究の刊行も、整理統合に対する同意を少なくとも示している——かもしれない。またその欠如がなお残るとしても、同じ理由に起因する観点の充実や、その欠如が認識の基礎を批判的に深化させることによって、埋め合わせられるかもしれない。しかし、いま試みたような種類の記述は、現状

の社会学には好まれていない。研究状況の概略は重要な研究成果をすべて挙示することとしてのみ可能であり、それらの研究成果はそれぞれの固有の意図に適した、統一的でより上位に置かれている観点にしたがって分岐する、と目されている。そうした既存の試みが示しているのは、共通の分母が欠けている、ということである。多様すぎる項目によって混乱した索引が作られるか、さもなければ異質な研究成果が批判的な報告者によって、不適切な分類基準というプロクルステスのベッドに押し込められるか、である。そうしたことは、諸潮流のあいだでの了解——専門辞典を刊行する学術政治的な第二の意図——には、ほとんど役立たない。あたかも書き手がゴルディアスの結び目を断ち切って自身で独自の体系の要綱を提示し、そこで読者がこの領域全体の研究状況について知るようになる、といったことがほとんどないのと同じである。この課題に対する理想的な解決ではないが、このジレンマからの少なくとも耐えられる逃げ道として、筆者は残る可能性を以下に挙げておく。

見解の争いの中からは、いくつかの基本思想が生じていると思われる。つまり——一貫して同じように明確であるわけではなく、一部はごく一般的で多義的な内容をもち、すべてが一致して認められるわけではないが——それにもかかわらず、一致の契機をなし、共通基盤の第一項目をなすと思われる、そうした思想である。ここで例を挙げておこう。個別科学的社会学を百科全書的 sociology とは別に、あるいはそれに抗して、認めること⁴⁾。自然科学のアナロジーから距離を取ること。法則の発見を放棄するか、社会的(および歴史的)法則と自然法則とを妥当性と論理構造にしたがって区別すること。現象学的方法が、たとえばさまざまな留保が付けられることが多いとはいえ、広く認められていること。体系社会学(systematische Soziologie)と歴史社会学とを、さまざまな区別の仕方があるにせよ、ともかく区別すること。実践的な問いの意図を放棄すること。「社会」という主題的概念の抽象的で関係的な性質についてますます一致が見られること、等々。以上の出発点はごくささやかなものであるだろう。しかし研究状況が不明瞭であることによってすでに、社会学の課題、下位分類、そして手法のイメージを、ここで研究成果の在庫目録を参照して読み解くのではなく、自分自身でその下絵から描かざるをえないとすれば、そのことは以下のやり方によって可能になると思われる。つまり、以上の出発点を指針として強調し、その代わりに輪郭は柔軟にしておくことで、可能なかぎり濃

淡に富んだ個別の理解のために遊域を保っておく、というやり方である。

ある科学の課題、下位分類、そして手法についての問いは、内部で必然的に連関しているため、繰り返しを避けるためここでまとめて論じておきたい。そしてその際の出発点は、課題設定にあると思われる。

1. 対象

ある科学の課題は、一般にその科学の対象によって規定される。ここで個別科学的社会学の道と百科全書的・普遍的社会学の道が分かれる。確かに両者とも、研究の事実領域ないし基体は共通している。それはつまり、人間の歴史的・社会的な現存と生の諸現象である。しかし普遍社会学は、「人間社会」を事物的対象として混ざり合った全体のもとで捉え、人間の事象そのものの多様な因子を同時に交わり合ったまま捉えようとしている。このような捉え方は直観か解釈的な構築によってのみ可能であり、厳密な経験科学的認識ではありえない。というのも、複合体における個別の因子（例えば、心理物理的な素質、自然に与えられた環境条件、客観的精神の力など）の特定の部分を、たがいにつき合わせて考量することができないからである。

そうした認識の意図のもとで、個別科学的社会学は「人間どうしの作用関係一般」(das zwischenmenschliche Wirkungsverhältnis überhaupt) を、物理的世界の中では結びついていてそれ以外の諸因子から抽象化する思考作用によって切り離し、社会に特有のそうしたものを人間生活と人間事象の他の諸因子と対峙させる。したがって個別科学的社会学の認識対象は、抽象的な「高次の対象」である。可能なかぎり一般的かつ柔軟に言い換えると、以下のとおりである。つまり、人間存在、人間事象、人間行為の要素ないし様相としての社会性 (Gesellschaftlichkeit) である。

こうした新しい科学的立場は、この50年の間にようやく——ドイツではゲオルク・ジンメルとフェルディナント・テンニース以来、フランスではガブリエル・タルドとエミール・デュルケーム以来——確立された。ジンメル⁵⁾や彼以後のアルフレート・フィーアカント [Vierkandt 1921] はこの研究方法を形式社会学と名づけ、それとともに人間生活の諸関係は形式または遂行様式として生の内容や事象内容 (宗教的、経済的、政治的内容など) から分離して研究されるべきである、と強調した。フェルディナント・テンニース [Tönnies 1925] による社会学の下位区分では、ここで述

べた分枝は普遍社会学 (universale Soziologie) と区別される特殊社会学 (spezielle Soziologie) として現れている。レオポルト・フォン・ヴィーゼはこれを一般社会学 (allgemeine Soziologie) と名づけ、それとともにここでは歴史的に一回的なものの継起ではなく、無時間的な性格をもつ体系的で一般的なものが重要である、と説いている [von Wiese 1926: 48-50 = 1928: 93-105]。

2. 課題

上で言い換えたような抽象的な対象をもつ個別科学がひとたび承認された——その正当性、認識価値、さらに必要性については、ときおり争われるのみである——とするならば、その科学の基本的な課題はおのずから産み出されてくる。

a) 中心課題

中心課題は以下の通りである。社会学は自身に特有の対象を、具体的な事実を括弧に入れることで抽出し「純粹」に記述する。それと同時にその対象を、さまざまな現象の仕方に応じて分化させる。そうすることによって社会学は、人間どうしの相互関係についての一般概念による、ある種の座標系つまり足場を得る。一般概念は社会化の目に見える特殊な部分、つまり地理的な場所、歴史的時間、文化内容の充実といったものの制約から、それらを「括弧に入れる」ことによって解放されている。一般概念はそれゆえ相対的に内容が空虚であるが、その代わりに一般的に妥当する。そうして例えば以下のような概念ができていく。相互作用一般 (Wechselwirkung überhaupt)、フォン・ヴィーゼによる過程、関係、形象の概念⁶⁾、フィアカントによる支援、承認、権力、敵対という四つの基本関係の概念⁷⁾、より特殊な形象の種類である集団、群衆、大衆、階層、組 (カップル) などの概念、指導や従属といった職能概念、客観化、制度、アンシュタルト、秩序、象徴といった第二段階の形象概念である。

これらの概念は一般的に妥当し、特にこれらの概念によって示される形式のもとで現れる歴史的時間や精神的内容からは独立して妥当する。例えば集団という概念は、ある家族やある議会同派にも、カエサルを殺した共謀者たちやあるメソジスト派の会派にも当てはまる。

したがってこれらの概念は、純粹に理論的・体系的な性格 (ヴェル

ナー・ゾンバルトは「理論的可能性」⁸⁾と呼んだ)をもつが、厳密に経験的な性格をもつものである。というのも、これらの概念は生の事実の直接的な観察や処理から単純な抽象化の手続きによって得られるものであり、その概念の内容それ自体は確かに現存しないが、現象の仕方としては見出すことができるからである。

比較によって得られる平均類型であるのか、一般化によって算出される規範類型であるのか、それとも理念化によって作り出される概念類型(理念型)であるのか——こうした問いは一つの方法問題であり、それぞれの経験的な性格を変えるものではない。以上の問いからは今日たいの場合、直接的な明証性、「本質直観」(Wesensschau)、いわゆる「内的経験」をどのようにして経験として認めるか、という点にのみ違いが現れている。通常は、異なる手法によって獲得された類型系列が並立しているか、一つの類型系列の獲得にあたっていくつかの手法が互いに補足し修正しながら共に作用している。しかし、現象学的な手法が濫用される傾向には抗して、以下の点に注意を促しておかなければならない。つまり、「直接的な洞察」(unmittelbare Einsichtigkeit)を引き合いに出して概念的に把握されるべきなのは、それ以上還元することのできない(つまり、社会学的カテゴリーである)知見だけである。というのも、さもなければ主観的な解釈の恣意に委ねることになるからである。

社会学の基本概念の体系は、多くの研究者の場合に心理学的思考との明かな親和性を示している。このことは社会概念そのものを構想する際に、認識もしくは確定可能な社会事象が、そこに関与する主体のもとで心的事象と対応している、という(そのこと自体は疑いえない)イメージを全面に押し出す場合に、おのずから生じている(「内的相互作用」としての社会化)。ここに含まれるのがテンニースの主意主義⁹⁾や、自身の体系の基礎に社会的に重要な人間の性質の学をも置いたフィーアカント¹⁰⁾である。この類型をフランスで代表しているのがタルド¹¹⁾であり、アメリカで代表しているのがチャールズ・A・エルウッド¹²⁾である。最も極端なのは、社会学と社会心理学を一体化させるものである。しかしながら心理学主義と正当に言えるのは、社会学の諸類型の心理学的な傾向を越えて、社会学の諸概念を心理学的に導出するか、あるいは社会的事実を心理学的に「説明」しようとする場合だけである。つまり例えばタルドやウィリアム・マクドゥガル¹³⁾であり、またジンメルにも同様の点がある(ゾンバ

ルトは心理学的社会学と精神学的社会学 (noologische Soziologie) の対立を、形式社会学の二つの流派ではなく、形式社会学と歴史的・唯物的社会学 (historisch-materiale Soziologie) の二元論に関わるものとして扱っている¹⁴⁾。

別の研究者たちは、社会的事象などを知覚可能な世界の中で経過するものと見なしており (それゆえ、誤って実証主義者と呼ばれている)、外的事象に「内的」事象も対応するということを否定はしないが、内的事象を「内的な随伴状態」として社会心理学に委ね、自分たちは外部世界で見出されるものの記述に限定している。その純粋な例はマックス・ツー・ゾルムス伯『人間集団の構造と区分』[Somls 1929]であり、その研究は行動主義が心理学に対するのと似た関係を心理学的な潮流に対して示している試みである。アメリカではロバート・E・パークによって最もよく代表されているこの類型は、心理社会的な類型と対等に並んでいる。

フォン・ヴィーゼは二番目に挙げた潮流に強く傾いている。フォン・ヴィーゼは社会的事象に心理的な構成要素を認め、社会学に特有の対象を扱う自身の概念の中でもその心理的な構成要素を取り上げているが、社会的なものを (社会心理学に対して境界線を引き) 物理的世界の中で表明された心理的なものとして定式化している¹⁵⁾。この観点をとる場合、例えばヴィルヘルム・シュトック [Stok 1929] とともに、社会学の対象としての関係と、関係に結びつくが関係に流入するわけではないもの、つまり「内的な残留物」としての心理的なもの——それがつまり、秘密、嘘、誤解である——とを区別することができる。この潮流の諸体系の中では、心理学指向の社会学や形而上学的な社会学のもとで重要な (ただし、両者それぞれで異なった) 役割を演じている「共同体」(本辞典の同項目を参照) という特定の概念が、大きく背景に退くか欠けるかしている (フォン・ヴィーゼ)。

ごく簡略にはあるが、ここでも実在関係 (Realität-Relation) の問題に立ち入らなければならない。というのも、この問題は社会学の方法にとって決定的に重要だからである (例えば本辞典「社会」項目の第Ⅲ節を参照)。一方で社会形象は、そこに関与する人びとに対して影響を及ぼす、超人格的または非人格的な性格をもつ「相対的に自立して」存在する力の中心と見なされている。他方で頑強な超人格主義者や有機体論者からは見過ごされているが否定しえないこととして、社会的形象は強く定着したも

のであっても、それ自体で「現存する」のではなく、人間に対して（あるいは人間のもとで）「遂行される」ものであり、したがって社会的形象に属するのは客体ないし超主体の性格ではなく、継続的に再生産される顕在性の性格である。そして疑似客体としての社会形象から出発するのか、それとも社会形象を担う人間から出発するのかは、発見法の問題であり、ときにもっぱら記述方法の問題である。前者の場合には構造学説が、後者の場合には関係学説が現れる（形象学—関係学¹⁶⁾）。この二つの方法は互いに補い合わなければならない。

一定の集団を形成しているのが、社会学の対象を心理的な内的領域でもなく、物理世界的な外的領域でもなく、客観的精神のうちを求める研究者たちである。つまり、客観的な集合精神の学説（近年のドイツではヴィルヘルム・イェルザレム¹⁷⁾が追究した）、デュルケーム学派の制度論、秩序形象としての社会把握（ルドルフ・シュタムラー¹⁸⁾、ハンス・ケルゼン¹⁹⁾）、関心（Interesse）を出発点とする理論（グスタフ・ラツェンホーファー²⁰⁾と彼に倣った何人かのアメリカの学者たち²¹⁾）などである。この点については、本辞典「社会」項目も参照されたい（ゾンバルトによる本辞典項目、特に「資本主義」と「経済」もその例である）。そうした「精神的（noologisch）」考察方法は確かに文化社会学や法社会学にとって有益であり、社会学の基本概念学に役立つことも多い。しかしながら、客観的精神の産物は社会的行為や事象の内容ではあるが、それ自体が社会という対象を形成しているのではない、という異論が依然として挙げられる。客観的精神の産物から出発すると、以下の重要な事実が背景に退くことになる。つまり社会学の主題である、客観的精神という形象の変化、なおかつ客観的精神に内在する動機づけに起因するのではなく、「社会化それ自体」という特殊な領域から一時的に出て作用する、そうしたかぎりでの変化である。自然主義にとっての因果説明的認識方法と同様に、この潮流に特有なのが目的考察である。因果考察の方法と目的考察の方法との結合は、ルドルフ・アイスラー²²⁾とルートヴィヒ・シュテフィンガー²³⁾が試みている。

一般社会学的な概念学を体系的に行っている著作は依然として少ない。しかし他の潮流や部門の研究には、この課題に取り組む個別の論考が多数点在している。マックス・ヴェーバーによる歴史社会学の諸論考は補論や序文でここに含まれる概念制作を提供している。理解をもって辛抱強く探求している「社会哲学者」の中にも、豊かな成果はある。例えばディート

リヒ・フォン・ヒルデブランドの『共同体の形而上学』[Hildebrand 1930]は、カトリック指向が強いにもかかわらず、個別科学的社会学にとってきわめて有益である。もっとも、個別科学的社会学にとって、こうした基本概念学は中核をなしている。テンニース [Tönnies 1925] は概念学を自身の区分による純粋社会学という部門の中で冒頭に位置づけており、(純粋社会学による) 概念構築研究は経験部門の帰納によって補完され、「応用」社会学は演繹的に行われるという。イザーク・アルタラツ [Altaraz 1918] の「純粋」社会学も、この部門に対応している。フォン・ヴィーゼの場合是一般関係学と一般形象学が社会学の全体系をなしており²⁴⁾、フィアカントの場合はそれに加えて文化社会学があるのみである²⁵⁾。

b) 二次課題——「社会」の社会学 („Gesellschafts“soziologie)

社会学の研究課題を以上に限定してしまうということは、苦勞して手に入れた道具立てを未使用のまま陳列棚にしまい込んでおくことを意味する。次なる課題は、手に入れた一般概念を社会の現実と対峙させ、一般概念を分類原理として社会の現実に応用することのうちにある。応用に一部関わるのが記述である。つまり、社会生活の实在形態、例えば家族やエズス会、国民運動やカイザーリング・サークルといったものが基本概念によって分析され、その構造のもとで捉えられる。

その次には下位類型も作り出される。例えば以下のように示される。指導や指導に関する一般諸類型は、経済の領域と宗教生活の領域とでは異なっており、また家族と国家とでは異なっており、特定の色合いや刻印を帯びている。そこで新たな関係づけや動機連関が推定される。

一般体系学が純粋に構築的に行われるべきものではないとするならば(テンニースの純粋社会学のように)、それ自体でそうした手続きを帰納的の制御として、そして例証のために継続的に行わなければならない。しかしそのとき一般体系学は、その概念構造上の思考分類がまさに求められるように、あちらこちらの生の領域へと出入りすることになる。さらにしかし例えば家族、政党、工業企業などの体系的の研究にとっては、一般類型をそれぞれ個別の社会関係に区分して見出すことのみならず、一般類型どうしを結びつけて把握すること、例えばある集団の成員数、実行形態、指導類型の間の関係を作り出すことなども、重要である。その先に類型形成から規則の発見への進展がある。

そうした研究が例えばローマ帝国時代の父権家族のように、歴史的に一回限りの類型をモノグラフ的に描く場合でさえ、そのことだけではまだ、もっぱら体系的な観点のみにしたがって研究を行っているかぎりでは、歴史的研究とはならない。それはまさに、今日のスラヴ人のザドルガや未開民族のシャーマン制の社会学的分析が研究対象の存在によって「民族学」になるわけではないのと同様である（この点についてより詳しくは、以下本節2d)「歴史社会学」を参照のこと）。

私はここに、文化領域全体の社会学的分析も加えたい。つまり、そこで経済が生じたり、科学が行われたりする、社会化の諸形態の記述である。それは様式の類縁関係を研究することとは異なる（この点についてより詳しくは、以下本節2c)「文化社会学」を参照のこと）。

この部門の締めくくりは、社会生活の諸現象の総体を個別の特殊性と相互の機能連関（「最大圏」「社会圏の交差」など）のもとで、上述の意味で「純粋」社会学的な観点から描くこと、つまり多数のモノグラフの組み合わせの中でのみ可能な作業であるだろう。

体系社会学のこの部分と深く関わるのは、テンニースの区分で言う応用社会学であり、そしてフォン・ヴィーゼがテンニースの区分に対する批判で社会誌 (Soziographie) や記述的社会知 (beschreibende Gesellschaftskunde) と呼んだものである²⁶⁾。フィアカントはこの部門に独立した地位を認めないが、この種のモノグラフ研究に関して「純粋形式社会学の帰納的拡張工事」と述べている²⁷⁾。

c) 文化社会学 (Kultursoziologie)

人間的な生の諸関係の社会学へと歩み寄っているのがいわゆる文化社会学であり、特別に項目を割くにふさわしい分野である。本稿では社会学という領域全体の課題と区分との像を埋めていくうえで必要なかぎりでのみ、この分野に言及するにとどめる。文化社会学は一方で、一般的な社会化形式を特定の文化内容をもつ個別の生の領域のもとで個別化し立証することとして、例えば類型的に経済的な社会化や類型的に宗教的な社会化などを記述することとして、理解されうる。つまりその場合「空虚な形式類型」を、その形式が実行される生の内容と対峙させることになる。この課題は本稿の分類では上述2b)に相当するだろう。

しかしたいいていの場合、文化社会学は文化の諸類型そのものについての

学説として、つまりある時代の文化の個別領域どうしの様式の類縁性や、(歴史的文化社会学!)文化の発展法則についての学説として、理解されている。そうした試みのもとで、ある文化ないし個別の文化領域における形式類型や法則と、文化財の在庫とを区別することができるかどうかには、疑いがある。その可能性を否定する場合、本稿で述べてきた意味での個別科学的社会学の枠内から出た、「唯物的」社会学〔形式社会学と対比される実質社会学〕と関わることになる。

ゾンバルトは形式的文化社会学の可能性を否定している。フィアカント学派のテオドル・ヴィルヘルム・ダンツェル²⁸⁾は近年、文化在庫と文化内容(=ある文化の特色)の区別のうえに一般的な文化学を構築しようと試みている。

いずれにしても考慮すべきと思われるのは、文化社会学は上述の「社会の社会学」と呼ばれる部門と対比される、ということである。というのも、「社会の社会学」とは一方でトートロジーであるが、他方でこの命名は社会化の諸形式が等しく、少なくとも直接的に文化の領域に属するわけではない、という印象を喚起するからである²⁹⁾。

言うまでもなく、文化社会学としてもくろまれている領域は認められなければならない、社会学の最重要の諸論考がこの部門に関するものであったことも自明である。疑問に付されるべきであるのはただ、この部門が社会学者の課題として遂行し社会学の領域に数え入れるべきものであるのか、それとも一般的な文化科学による文化形式の学(つまり唯物的歴史哲学と区別される)に割り当てられるべきものであるのか、ということのみである。

d) 歴史社会学 (Historische Soziologie)

最近の社会学は、特に歴史学者たちによって否認されてきた承認をめぐる闘いや、純粋な研究路線を求める努力の中で、一部で歴史社会学に対する抵抗に行き着いている。歴史社会学への反対が、社会学主義的な歴史解釈に対する明確な境界画定を問題としているのであれば、確かに歓迎すべきものである。

しかしながら百科全書的な曖昧さを離れたところに、歴史社会学研究の可能性は存している。そのための予備作業は、上記2b)で述べた体系社会学がすでに行っている。

この分野の課題は、社会生活の個別領域のもとで、あるいは社会生活が高度に組み合わせられた大きな構造のなかで、社会化の形式が発展する際に辿ってきた道程を立証することであるだろう。そうすると個別科学としての性格は、例えば家族の歴史ではなく家族という社会構造の歴史を、また経済の歴史ではなく経済の領域における社会化の形式の歴史を示すことによって、保証されると考えられる。

体系社会学との違いは、類型的な構造や関係を一般概念へと昇華させたり（一般部門）、あるいは具体的な現象のもとで立証したり、下位類型へと分化させたり、また結合類型へと結びつけたりするのではなく（特殊部門）、社会化の諸形式の連続を経過として記述することのうちにある。このあとに残る特有の問いは、リズム、「類型的」経過、傾向の（個性記述的な）確定にとどめるのか、それとも（法則定立的に）経過法則の算出を求めるのか、ということである。

この種の個別研究の中で立証しようと考えられるのは、体系の一定の類型系列が併せて類型的経過を示していないかどうか、ということである。例えばマックス・ヴェーバーの三つの支配類型³⁰は現実には指導の類型的な発展経過の系列を示しているのか、それとも無時間的に妥当する形式としてそれぞれの類型が互いに独立して現れるのか。

社会化の凝集から拡張への進歩の傾向はみられるのか。本質意志から選択意志へはどうか。親密型から有機型へはどうか。伸縮形式から硬直（固定）形式へはどうか。単純な社会構造から複雑な社会構造へはどうか。素朴型から制度型へはどうか。

包括的な記述によって社会形態の歴史が産み出される。そして最終的な成果としては、社会の分枝や階層の諸類型の経過に関する記述が産み出される。したがって例えば地位、階級、カーストといった概念は、一般体系社会学ではなく歴史社会学の類型である。

歴史社会学の主題をなす課題と上述の文化社会学の主題をなす課題の間には部分的に共通点があるが、以下の点で違いがある。つまり歴史社会学では、社会関係と関係形象とを「文化内容」から切り離して限定することを厳密に維持し続けている。

e) 一般社会学 (Allgemeine Soziologie)

まったく別の問いは、個別科学的社会学に加えて、人間社会に関わる認

識の総合的概観を他の諸科学(例えば社会生物学、社会人間学、心理学など)にも認めるどうか、という点にある。テンニースは社会のそうした概括的科学的余地を自身の区分の中で認め、それを一般(=普遍)社会学と名づけた。この一般社会学には、「唯物的〔=実質〕社会学の観点(したがって文化財社会学)も共に包括されている。その可能性と権利を肯定することは、特に非専門家による社会的世界の全体像への欲求に対応しているが、そうした概観を社会学という科学の課題として打ち立てることをなすお意味するわけではない。ここで意味されているのはおそらく、科学の一分野ではなく百科全書的的社会知(enzyklopädische Gesellschaftskunde)であり、研究者ではなく記述者による成果である。

f) 実践社会学 (Pragmatische Soziologie)

一部の研究者たちは社会学一般に対して実践的目標を設定するか、あるいは少なくとも理論に加えて実践論を打ち立てている。例えばオーギュスト・コントは「予見するために知る、先手を打つために予見する」ことを望んだ。アメリカ社会学のほとんど全体に見られるのは、合理主義的な進歩楽観論に付随する現象として説明しうる、活動家的・改革者的な傾向である。アメリカでは社会学が広義の政策や社会政策のある種の理論となっている。レスター・F・ウォードは理論(純粋)社会学の隣に応用社会学、つまり社会発展の目標指向的(目的論的)影響の学説を設定し、その学説をごく一般に貫いている³¹⁾。エドワード・A・ロスによれば、「社会学者は何かを変えようと望んでいる人」である³²⁾。ドイツ・イギリスの社会学者アーサー・クラウス(『病める社会』[Kraus 1929])は、社会学を社会改良の学として、つまりある種の社会病理学や社会治療学として基礎づけることを試みた。他にも例えばハーバート・N・シェントンは、あらかじめ実践的な応用可能性に照準を合わせた社会学理論(応用可能な社会学)を求めている³³⁾。社会学はアメリカにおいて、社会学的洞察の直接的に実践的な価値が信じられているおかげで評価されており、また福祉職員、牧師、教師の養成において一定の役割を担っている。そして「応用」部門は今では二つの課題圏に分割されている。第一にコントに由来する唯物的歴史哲学に対する実践的反对物が社会的・(規範的)政治的目的論であり、第二に狭義の分析的 sociology や社会心理学に対する実践的反对物が社会的・政治的技術論である。この分岐は教育社会学において特に明瞭である。第

一の社会的・政治的目的論の部分は、アメリカで文化批判が盛んになるにつれて、社会学理論もまたますます歴史哲学的・進歩楽観論的な方向を離れてむしろ分析的な方向を指向しているように、意義を減じていると思われる。

ドイツにおいて実践的・活動的な傾向はまずローレンツ・フォン・シュタインに見られ、マルクスやマルクス主義の社会学においても優勢である。ルドルフ・ゴルトシャイトの人間経済学は実践的であり³⁴⁾、またマックス・アドラーは理論的・体系的社会学を非活動的な性格ゆえに根本的に否定している³⁵⁾。以上の革命的政治社会学の主張者たちに加えて、社会改良的な実践家たちも見出される。ルートヴィヒ・グンプロヴィッチや彼の学生だったラッツェンホーファーは社会学を政治的理論術として扱い³⁶⁾、特にそのことによってスモールが彼らの学説を輸入して以降アメリカで知られるようになったのは確かである³⁷⁾。グンプロヴィッチと少なくとも一点で近い関係にあるフランツ・オッペンハイマーも、ここに加えてよいかもしれない。マックス・ヴェーバーはより初期(1904年頃)に同様の態度をとっていた³⁸⁾。カール・ブリンクマンによる、社会学はバロック的な「社会権力に対する知識人の持続的な反抗」から生まれたとするテーゼは、社会学の実践的・政治的な特徴づけを好むものである³⁹⁾。最近ではジークフリート・ランツフトが『社会学批判』[Landshut 1929 = 1963]の中で、社会学は実践的な問いの意図のもとでのみ行われるべきものであると断じている。

ヴィルヘルム・H・リールの『市民社会』[Riehl 1851]は、身分制的な社会政策を意図した実践的な社会知であった。カール・ドゥンクマンは理論部門と実践部門を区別せず、シェントンと同様に、ただし倫理的な動機連関から、理論社会学と実践社会学を一体のものとして捉えようという特殊な立場をとっている⁴⁰⁾。

社会学がいわば流行品となっているという事実は、この潮流のもとで直接的に影響を与えている。一方で他の諸学の一部は、社会学的洞察から自分野にとっての規範を引き出せると信じている。したがって今日例えば教育学の圏内で、社会学は教育学的目的論をもたらしようという見解が広がっている(社会学的教育学)。他方で以下の傾向も急速に広まっている。つまり、政治的・社会的要求を「科学的」に根拠づけられたものとして記述し、その際に社会学の流行を利用し、そして「真の」ないし「健全

な] 社会の理想像を描くという、そうした傾向である。そうした点で社会学は、1880年代のダーウィニズム生物学と同様の何でも屋の役割を通俗文献の中で演じている。

純粹理論社会学の重要な主張者たちも(例、フォン・ヴィーゼ)、社会学的认识をさまざまな実践的課題(行政、政治、社会政策、教育など)や、隣接諸学(経済学、歴史学、一般国家学・法学)に役立てることは否定していない。しかし彼らはそうした応用を利用者たち自身に委ね、科学としての社会学は真理という価値だけを指向するものであって利用価値を指向するものではない、と(正しく)見なしたがっている。

文献紹介

社会学の潮流、課題、方法全体については、ほぼすべての主要な社会学の著作の導入章で論じられているが、特に詳しいのはフランツ・オッペンハイマー『社会学体系』第1巻(Oppenheimer 1922)である。

特に社会学の課題と下位分類については、以下の文献が論じている。エルンスト・トレルチ『歴史主義とその諸問題』(Troeltsch 1922 = 1980-1988)、アルフレート・フィーアカント「形式社会学説のプログラム」『ケルン社会科学四季報』第1巻1号(Vierkandt 1921)、『マックス・ヴェーバー記念論集』(Palyi編 1923)に対するエドゥアルト・シュブランガーの批判[「マックス・ヴェーバー記念論集における社会学」]『シュモラー年報』第49巻6号(Spranger 1925)、フェルディナント・テンニース「社会学の区分」『総合国家学雑誌』第79巻1号(Tönnies 1925)。加えて、以下の文献も参照されたい。レオポルト・フォン・ヴィーゼ[「諸著作の關係学的な帰納と分析の手法」]『ケルン社会学四季報』第5巻1号(Wiese 1925)⁴⁾、ヘルマン・U・カントロヴィッチ「社会学の構成」『マックス・ヴェーバー記念論集』第1巻(Kantorowicz 1923)、ロベルト・ミヘルス[「侵入」学としての社会学について]『ケルン社会学四季報』第4巻(Michels 1925)、ハンス・フライヤー『現実科学としての社会学』(Freyer 1930 = 1944)。

社会学の潮流については、以下の文献が概要を伝えている。レオポルト・フォン・ヴィーゼ『社会学』(von Wiese 1926 = 1928)、フィリッポ・カルリ『社会学理論』(Carli 1925)、ファウスト・スキラーチェ『社会学理論』(Squillace 1911)、ピティリム・A・ソローキン『現代社会学理論』

(Sorokin 1928)。最後のソローキンの著作は包括的な批判的文献史であるが、一貫して慎重に受容されているドイツ社会学についての判断は、一部は十分に深められておらず、一部はまったく誤っている。

社会学の方法問題については、概観できる資料が専門誌の中に今のところ存在していない。一般論として重要なのは、歴史的法則(と社会的法則)の可能性の問題に関する文献(本辞典「歴史的法則と社会的法則」項目を見よ)と、さらに「理解と説明」に関する文献、そして一般的な類型形成と特に「理念」型 („Ideal“-Typen)に関する文献である。

社会学方法論に特化した文献としては、以下のものがある。フリッツ・レヴィ『社会学の方法』(Lewy 1927)、ジークフリート・クラカウアー『科学としての社会学』(Kracauer 1922)、エミール・レーデラー「社会学における方法論争」『社会学雑誌』第15号・16号(Lederer 1925 = 1925)、ハンス・オッペンハイマー『社会学的概念形成の論理』(Oppenheimer 1925)。このうちクラカウアーの著作は極端に現象学的である。また近年の文献で教わることの多いものには、『民族心理学・社会学雑誌』1930年号・1931年号に収録されているシンポジウム(同企画にはアンドレアス・ヴァルター〔「完全なる社会学の実現に向けて」(Walther 1929)〕、フライヤー「現実科学としての社会学」(Freyer 1929)、ヨハン・プレング〔「専門ディシプリン、全体社会、そして万物学」(Plenge 1929)〕、ソローキン〔「個別科学としての社会学」(Sorokin 1930)〕、モリス・ギンスバーグ〔「社会学の境界と課題」(Ginsberg 1930)〕、ルドルフ・S・シュタインメツ〔「実証的特殊科学としての社会学」(Steinmetz 1931)〕らの報告が収録されている⁴²⁾)と、エウジェニオ・リニャーノ「社会学の方法と法則」『ケルン社会学四季報』第7巻(Rignano 1928)がある。最後のリニャーノの著作は、唯物的歴史哲学の観点からのものである。

文 献

Altaraz, Isaak, 1918, *Reine Soziologie: Darstellung und Kritik der Typischen Versuche zur Schaffung einer philosophischen Sozialwissenschaft*, Berlin: Arthur Scholem.

Carli, Filippo, 1925, *Le teorie sociologiche*, Padova: C.E.D.A.M.

Freyer, Hans, 1929, »Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft«, *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*, 5(3): 257-266.

Freyer, Hans, 1930, *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft*, Leipzig und Berlin: B.G.

- Teubner. (=1944, 福武直訳『現實科學としての社會學』日光書院.)
- Ginsberg, Morris, 1930, »Grenzen und Aufgaben der Soziologie«, *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*, 6(2): 129-143.
- Hildebrand, Dietrich von, 1930, *Metaphysik der Gemeinschaft: Untersuchungen über Wesen und Wert der Gemeinschaft*, Augsburg: Haas & Grabherr.
- Kantorowicz, Hermann Ulrich, 1923, »Der Aufbau der Soziologie«, Melchior Palyi (Hg.), *Hauptprobleme der Soziologie: Erinnerungsgabe für Max Weber*, 1. Band, München und Leipzig: Duncker & Humblot, 73-96.
- Kracauer, Siegfried, 1922, *Soziologie als Wissenschaft: Eine erkenntnistheoretische Untersuchung*, Dresden: Sibyllen-Verlag.
- Kraus, Arthur James Israel, 1929, *Sick Society*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Landshut, Siegfried, 1929, *Kritik der Soziologie: Freiheit und Gleichheit als Ursprungsproblem der Soziologie*, München: Duncker und Humblot. (=1963, 樺俊雄訳『社会学批判——社会学の基本問題としての自由と平等』岩波書店.)
- Lederer, Emil, 1925, »Zum Methodenstreit in der Soziologie: Ein Beitrag zum Grundproblem einer „verstehenden Soziologie“«, I-II, 『社會學雜誌』日本社會學會編, 15: 1-16, 16: 1-18. (=1925, 「社會學方法論上の論争に就いて——Verstehende Soziologieの根本問題に関する一考察」一・二, 『社會學雜誌』日本社會學會編, 15: 1-20, 16: 1-22.)
- Lewy, Fritz, 1927, *Die soziologische Methode*, Karlsruhe: G. Braun.
- Michels, Robert, 1925, »Zur Soziologie als „Einbruchs“-Lehre«, *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie*, 4: 125-139.
- Oppenheimer, Franz, 1922, *System der Soziologie*, Bd. 1: *Allgemeine Soziologie*, Teil 1: *Grundlegung*. Jena: Fischer.
- Oppenheimer, Hans, 1925, *Die Logik der soziologischen Begriffsbildung: Mit besonderer Berücksichtigung von Max Weber*, Tübingen: J.C.B. Mohr (P. Siebeck).
- Palyi, Melchior (Hg.), 1923, *Erinnerungsgabe für Max Weber*, 2 Bde., München und Leipzig: Duncker & Humblot.
- Plenge, Johann, 1929, »Als dritter Redner im Symposion« [Neu gedruckt in 1932 als »Fachdisziplin, Totalgesellschaft und Pantologie«], *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*, 5(4): 385-405.

- Riehl, Wilhelm Heinrich, 1851, *Die bürgerliche Gesellschaft*, Stuttgart: J. G. Cotta.
- Rignano, Eugenio, 1928, »Die Soziologie, ihre Methoden und Gesetze«, I-II, *Kölner Vierteljahrshäfte für Soziologie*, 7: 257-276, 375-390.
- Solms, Max Graf zu, 1929, *Bau und Gliederung der Meschengruppen*, T.1-2, Karlsruhe: G. Braun.
- Sorokin, Pitirim Aleksandrovich, 1928, *Contemporary Sociological Theories*, New York and London: Harper.
- Sorokin, Pitirim Aleksandrovich, 1930, »Die Soziologie als Spezialwissenschaft«, *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*, 6(1): 1-9.
- Stok, Wilhelm, 1929, *Geheimnis, Lüge und Missverständnis: Eine beziehungsweise wissenschaftliche Untersuchung*, Beiträge zur Beziehungslehre, Heft 2, München: Duncker & Humblot.
- Spranger, Eduard, 1925, »Die Soziologie in der Erinnerungsgabe für Max Weber«, *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 49(6): 149-165.
- Squillace, Fausto, 1911, *Die soziologischen Theorien*, übers. von Rudolf Eisler aus dem italienischen Handexemplar, Leipzig: W. Klinkhardt.
- Steinmetz, Rudolf S., 1931, »Soziologisches Symposion VIII: Die Soziologie als positive Spezialwissenschaft«, *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*, 7(1): 1-10.
- Tönnies, Ferdinand, 1925, »Einteilung der Soziologie«, *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, 79(1): 1-15.
- Troeltsch, Ernst, 1922, *Gesammelte Schriften*, Bd. 3: *Der Historismus und seine Probleme*, 1. Buch: *Das logische Problem der Geschichtsphilosophie*, 2. Hälfte, Tübingen: J.C.B. Mohr (P. Siebeck). (=1980-1988, 近藤勝彦訳『歴史主義とその諸問題』上・中・下, トレルチ著作集4-6, ヨルダン社.)
- Vierkandt, Alfred, 1921, »Programm einer formalen Gesellschaftslehre«, *Kölner Vierteljahrshäfte für Sozialwissenschaften*, Reihe A: *Soziologische Hefte*, 1(1): 56-66.
- Walther, Andreas, 1929, »Zur Verwirklichung einer vollständigen Soziologie«, *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*, 5(2): 131-143.
- Wiese, Leopold von, 1925, »Das Verfahren bei beziehungsweise wissenschaftlichen Induktionen und Analysen von Schriftwerken«, *Kölner Vierteljahrshäfte für Soziologie*,

5(1): 84-90

Wiese, Leopold von, 1926, *Soziologie: Geschichte und Hauptprobleme*, Göschen: Walter de Gruyter. (=1928, 黒川純一訳註『社会学——歴史及主要問題』刀江書院.)

訳注

1) 以下にガイガーの経歴を記しておく。経歴、業績、影響の詳細については、下記〈1〉に挙げるジークフリート・バッハマン編ほかの諸文献を参照のこと。また下記〈2〉にて、ガイガーの主要著作を挙げておく。

テオドル・ガイガーは1891年にミュンヘンで生まれ、ギムナジウム教師だった父の転勤によりミュンヘン近郊のランツフトで青年期までを過ごした。若い頃からフィンランド文学に親しみ、大学入学祝いにはノルウェー旅行に出かけるなど、北欧への関心を早くからもっていたという。大学入学後はミュンヘン大学で2年、残り2年はヴェルツブルク大学で法学・国家学を学んでいる。第一次世界大戦勃発後には志願兵としてロシア戦線に参加し、負傷して除隊したのち、1919年にヴェルツブルク大学で少年の保護観察に関する学位論文により法学博士を取得した。また1918年には社会民主党に入党し、1932年に離党するまで活動を続けているが、1920年にはベルリンに移り、記者や補習教員として働いている(特に北欧諸国報道の専任記者ともなっている)。その後、大ベルリン市民大学(Volkshochschule Groß-Berlin)や国立統計局・商業統計部門の臨時職員となり、1924年から1928年にはその市民大学の運営者兼講師として主に労働者教育に従事していた。それと並行して、1924年からはブラウンシュヴァイク工科大学で非常勤講師を務め、1928年には同大学で社会学講座の員外教授に招聘され(テンニースとフィーアカントによる推薦があったという)、1929年には正教授に就任している。

やがてブラウンシュヴァイク州政府にもナチスが浸透するなかで、ガイガーはナチ党の思想やプロパガンダに反対する論考を書き、ナチ党の人事政策にも反対していた。1932年にはオーストリア出身のアドルフ・ヒトラーにドイツ国籍を与えるための名目として、ナチ党からブラウンシュヴァイク工科大学に「有機社会学説・政治学」(Organische Gesellschaftslehre und Politik)講座を設置しその員外教授にヒトラーを就任させる要求があったが、同大学の評議会と州議会野党の社会民主党による反対で失敗に終わった。ガイガーは同大学の社会学講座の教授として、この反対に関わったとも言われている

(しかし結局ヒトラーは、ブラウンシュヴァイク州ベルリン駐在公使館付参事官兼経済問題担当官の肩書を得て、大統領選挙を目前にドイツ国籍を取得した)。

ナチス体制が成立した1933年、ガイガーはブランシュヴァイク工科大学から解任され、同年ただちに社会科学者の知人が数人おり支援の得られたデンマークに逃れている。そこでロックフェラー財団の研究助成を受けて歴史学・国民経済学研究所 (Institutet for Historie og Samfundøkonomie) の共同研究員となり、コペンハーゲン大学の客員講義も担当している。1938年には新制のオーフス大学でデンマーク初の社会学正教授に就任した。しかし1940年にナチス・ドイツがデンマークに進駐し、ガイガーはオーフス大学を辞めざるをえなくなる。数年は沿岸部を離れ、義父母を頼ってフン島のオーデンセで過ごした。それでも1943年にはデンマーク住民にもナチス支持者が浸透し刑事訴追のおそれがあったため、中立国のスウェーデンにさらに逃れた。同国ではストックホルムに滞在し、ストックホルム、ウプサラ、ルンドの各大学の支援を受けて客員講義を担当している。

1945年の終戦後ほどなくして、ガイガーはふたたびデンマークのオーフス大学に戻っている。そこでスカンディナヴィア諸国初の社会学研究機関である附属社会研究所を設立し、戦後に社会学講座が設置された各国の研究者らと叢書『北欧社会学研究』(*Nordiske Studier i Sociologie*) を刊行している。その叢書はガイガーの死後も『アクタ・ソシオロギカ——スカンディナヴィア社会学評論』(*Acta Sociologica: Scandinavian Review of Sociology*, 1955～) となって刊行され続けている。また1949年の国際社会学会 (ISA) の設立には、スカンディナヴィア諸国代表として携わった。その後、1951年と1952年にはカナダのトロント大学で客員教授を務め、その間に北米の複数の大学で講義を行っている。しかしガイガーは、1952年6月にそのカナダからデンマークへと戻る洋上で急逝した。

(1. ガイガー二次文献)

- ・ Bachmann, Siegfried (Hg.), 1995, *Theodor Geiger, Soziologe in Zeit "zwischen Pathos und Nüchternheit": Beiträge zu Leben und Werk*, Berlin: Duncker & Humblot.
- ・ Knospe, Horst, 1980, »Geiger, Theodor«, Wilhelm Bernsdorf und Horst Knospe (Hg.), *Internationales Soziologenlexikon*, Bd.1, *Beiträge über bis Ende 1969 verstorbene Soziologen*, 2., neubearbeitete Aufl., Stuttgart: Ferdinand Enke, 138-

142.

- ・ Meyer, Thomas, 2001, *Die Soziologie Theodor Geigers: Emanzipation von der Ideologie*, Wiesbaden: Westdeutscher.
- ・ 大本晋, 1971 「解説」 テオドール・ガイガー 『イデオロギーと真理——思考の社会学的批判』 大本晋訳, 新泉社, 241-271.
- ・ 鈴木幸壽, 1959 『ガイガー』 人と業績シリーズ7, 有斐閣.
- ・ Trappe, Paul, 1978, »Theodor Geiger«, Dirk Käsler (Hg.), *Klassiker des soziologischen Denkens*, Bd.2, *Von Weber bis Mannheim*, München: C. H. Beck, 254-285, 474-488, 541-544.

(2. ガイガー主要著作)

- ・ *Die Masse und ihre Aktion: Ein Beitrag zur Soziologie der Revolutionen*, Stuttgart: Ferdinand Enke, 1926. (司法省刑事局思想部編 『群衆とその行動——革命社会学のための一貢献』 [堀秀彦訳] 思想研究資料第13輯, 1930年.)
- ・ *Die Gestalten der Gesellung*, Karlsruhe: G. Braun, 1928.
- ・ *Die soziale Schichtung des deutschen Volkes: Soziographischer Versuch auf statistischer Grundlage*, Stuttgart: Ferdinand Enke, 1932.
- ・ *Erbpflege: Grundlagen, Planung, Grenzen*, Stuttgart: Ferdinand Enke, 1934.
- ・ *Sociologi: Grundrids og Hovedproblemer*, København: Nyt Nordisk Forlag Arnold Busck, 1939.
- ・ *Kritik af Reklamen*, København: Nyt Nordisk Forlag Arnold Busck, 1943.
- ・ *Intelligensen: De andligt skapandes uppgift och öde i samhället*, övers. av Vanja Lantz, Stockholm: Wahlström & Widstrand, 1944. (Deutsche Aufl.: *Aufgaben und Stellung der Intelligenz in der Gesellschaft*, Stuttgart: Ferdinand Enke, 1949; 鈴木幸壽訳 『知識階級』 玄海出版社, 1953年.)
- ・ *Klasseamfundet i Støbegryden*, København: Gad, 1948. (Deutsche Aufl.: *Die Klassegesellschaft im Schmelztiegel*, Köln und Hagen: G. Kiepenheuer, 1949; 鈴木幸壽訳 『あたらしい階級社会——その問題点と方向』 誠信書房, 1957年.)
- ・ *Den Danske intelligens fra reformationen til nutiden: En studie i empirisk kultursoziologi*, Aarhus: Universitetsforlaget/København: Munksgaard, 1949. (Deutsche Übs.: *Die dänische Intelligenz von der Reformationszeit bis zur Gegenwart: Eine empirisch-kultursoziologische Untersuchung, Theodor-Geiger-Gesamtausgabe*, Abt.4, Bd.3, hrsg. von Klaus Rodax, Frankfurt am Main: Peter Lang, 2005.)
- ・ *Ideologie und Wahrheit: Eine soziologische Kritik des Denkens*, Stuttgart und Wien:

Humboldt, 1953. (大本晋訳『イデオロギーと真理——思考の社会学的批判』新泉社, 1971年.)

- ・ *Die Gesellschaft zwischen Pathos und Nüchternheit*, Aarhus: Universitetsforlaget/København: Munksgaard, 1960. (大本晋訳『激情と思慮の間の社会』新泉社, 1973年.)

(3. ガイガー全集)

- ・ *Theodor-Geiger-Gesamtausgabe (TGG)*, hrsg. von Klaus Rodax, Frankfurt am Main: Peter Lang, 2002～. (7部31巻を予定.)

(4. ガイガー文庫)

- ・ Theodor-Geiger-Archiv am Institut für Sozialwissenschaften der Technischen Universität Braunschweig. (刊行物、草稿等の写し、旧蔵書などを収蔵。上記1.のBachmann編(1994:1ほか)も参照。また同大学ホームページの以下のリンクにも記載がある。<https://www.tu-braunschweig.de/sao/arbeit/geiger> (2020年10月25日最終閲覧).)

2) フィーアカント編『社会学辞典』については、以下のルネ・ケーニヒの文献などを参照のこと。René König, 1981, »Soziologie in Berlin um 1930«, M. Rainer Lepsius (Hg.), *Soziologie in Deutschland und Österreich 1918-1945: Materialien zur Entwicklung, Emigration und Wirkungsgeschichte*, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, hrsg. von René König et al., Sonderheft 23, Opladen: Westdeutscher, 24-58, 特にS.24-33; 同, 1984, »Über das vermeintliche Ende der deutschen Soziologie vor der Machtergreifung des Nationalsozialismus«, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 36(2): 1-42, 特にS.26-30. 日本での同辞典の受容に関しては、例えば日本語の社会学辞典の嚆矢をなす以下二辞典の冒頭での言及を、またガイガー本項目の参照例と位置づけに関しては以下の清水幾太郎の著作と、森東吾によるヴァイマル共和国前後のドイツ社会学史のまとめを参照のこと。新明正道編, 1944『社会学辞典』河出書房, 1頁; 福武直・日高六郎・高橋六郎編, 1958『社会学辞典』有斐閣, はしがき, 2頁; 清水幾太郎, 1950『社会学講義』岩波書店, 3-18頁ほか; 森東吾, 1957「ドイツ社会学」阿閉吉男・内藤莞爾編『社会学史概論』勁草書房, 192-299, 特に198-220頁ほか。また日本でのガイガーの社会学理論の受容例として、以下のリットらによる初期の現象学的社会学を日本に紹介した蔵内数太の著作や、その蔵内や森のもとで学び注2(2)に挙げたガイガーの著書2冊を翻訳した大本晋の著作も参照のこと。蔵

内数太, [1962] 1966『社会学』培風館、増補版；大本晋, 1987『社会学基礎理論——近代化と共同体意識』九州大学出版会。

- 3) 個別科学的経験社会学(狭義の社会学)を含む社会学の主要潮流の分類は、別稿(日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』101号、2020年2月刊行予定)に訳出した(Ⅰ)を参照のこと。またガイガーが本稿で言う経験社会学と、ドイツで主に第二次世界大戦後にアメリカから(逆)輸入された社会調査と統計分析に基づく経験社会学との異同も想起されたい(ただし、ガイガー自身も本稿では注26の箇所でも取り上げた「社会誌」に含まれる統計研究にドイツ時代から取り組んでおり、とりわけデンマーク移住後は調査研究に注力していったと言われている)。この点については注1〈1〉で挙げたBachmann編(1995: 63-68)とそこで言及されているルネ・ケーニヒほかの諸文献、また第二次世界大戦後のケーニヒといわゆるケルン学派による経験的社会調査に関して例えば以下を参照のこと。Stephan Moebius, 2017, »Die Geschichte der Soziologie im Spiegel der Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie (KZfSS)«, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 69 (1 Supplement): 3-44, 特にS.18-19。(=2019, 梅村麦生訳『ケルン社会学・社会心理学雑誌』(KZfSS)にみる社会学の歴史(下)』『京都社会学年報』27: 119-148, 特に119-121頁。)
- 4) 近代社会学の二大潮流としての歴史哲学的・百科全書的潮流と、分析的・個別科学的潮流という区分については、フィアカントの以下の文献を参照のこと。Alfred Vierkant, 1923, *Gesellschaftslehre: Hauptprobleme der philosophischen Soziologie*, Stuttgart: Ferdinand Enke, 特にEinleitung, §1. Die beiden Hauptrichtungen in der modernen Soziologie und §2. Die einzelnen Richtungen in der Soziologie, S.1-13. またフィアカントがその区分に際して依拠し、本項目(Ⅰ)3a「社会的百科全書派」の箇所でも言及されているエルンスト・トレルチの以下の文献も併せて参照のこと。Ernst Troeltsch, 1916, »Zum Begriff und Zur Methode der Soziologie«, *Weltwirtschaftliches Archiv*, 8(2): 259-276.
- 5) Georg Simmel, 1917, *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, Berlin und Leipzig: G.J. Göschen, 1. Kap: Das Gebiet der Soziologie, 3. Kap: Die Geselligkeit (Beispiel der Reinen oder Formalen Soziologie), S.5-33, 71。(=1966, 阿閉吉男訳『社会学の根本問題——個人と社会』社会思想社, 第1章「社会学の領域」, 第3章「社交性(純粹社会学あるいは形式社会学の例)」, 11-51, 76-107頁。)

- 6) Leopold von Wiese, 1924, *Allgemeine Soziologie als Lehre von den Beziehungen und Beziehungsgebilden der Menschen*, Teil 1: Beziehungslehre, München und Leipzig, Duncker & Humblot, 1. Kapitel: Allgemeine Grundzüge der Beziehungslehre. Verhältnis von Beziehung und Gebilde, 特に §30. Thesenartige Zusammenfassung des ersten Kapitels, S.31-32を参照のこと。
- 7) 注4のVierkant (1923: 179-294, 3. Kapitel. Die gesellschaftlichen Grundverhältnisse)などを参照のこと。
- 8) 「形式社会学と呼ばれるものはすべて、社会関係の理論的可能性を提示するものに他ならない」(Werner Sombart, 1923, »Einleitung«, *Soziologie*, bearbeitet unter Mitwirkung von H. L. Stoltenberg, Berlin: Rolf Heise, S.5-16 (引用はS.11) = 1923, 景山哲雄訳「緒論」『社会学』而立社, 3-22頁 (引用は14頁))。
- 9) Ferdinand Tönnies, [1907] 1925, »Das Wesen der Soziologie«, *Soziologische Studien und Kritiken*, 1. Sammlung, Jena: Gustav Fischer, S.350-368, 特にS.350-353など。
- 10) Alfred Vierkant, 1928, *Gesellschaftslehre: Hauptprobleme der philosophischen Soziologie*, 2. völlig umgearbeitete Auflage [1. Auflage, 1923, 注4既出], Stuttgart: Ferdinand Enke, 特に1. Kapitel: Die sozialen Anlagen des Menschen und das Wesen der Gesellschaft, S.23-207など。またフィアカント自身による本辞典「社会心理学」項目 (Alfred Vierkant, 1931, »Sozialpsychologie«, Alfred Vierkant (Hg.), *Handwörterbuch der Soziologie*, Stuttgart: Ferdinand Enke, S.545-564) およびそこで挙げられている諸文献も参照のこと。
- 11) Gabriel Tarde, 1895, *La logique sociale*, Paris: Felix Alcan, 特にCh. II. L'esprit social (Logique sociale statique), pp.87-133など。
- 12) Charles A. Ellwood, 1912, *Sociology in its Psychological Aspects*, New York: D. Appleton. (= [1923] 2008, 宮崎市八訳『心理学的社会学』日本図書センター.)
- 13) William McDougall, 1908, *An Introduction to Social Psychology*, London: Methuen. (= 1925, 宮崎市八訳『社会心理学概論』アテネ書院.)
- 14) ゾンバルトは注6の文献 (Sombart 1923 = 1923) で以下のように記している。「特に前もって注意すべきなのは、私が強調した心理学的(西欧的)社会学と精神的(ドイツ的)社会学との対立を実質的一形式的(material-formal)というかの対立と同一視してはならない、ということである。……したがって私の信ずるところでは、形式的-実質的という対立はまったく放棄し、そ

の代わりに理論的—経験的という別の対立を指定し、それを一般的—特殊的という対立によって補うべきである」(S.11 = 13-14頁)。またゾンバルトは「精神学的社会学 (noologische Soziologie)」を「精神科学的社会学 (geist-wissenschaftliche Soziologie)」とも言い換えている(同上、S.11 = 13頁)。

- 15) 例えば注 6 に挙げた Wiese (1924: 19-20, 42-43) を参照のこと。
- 16) 注 6、15 に挙げた Wiese (1924) およびその第 2 巻である以下の副題を参照のこと。Leopold von Wiese, 1929, *Allgemeine Soziologie als Lehre von den Beziehungen und Beziehungsgebilden der Menschen*, Teil 2: Gebildelehre, München und Leipzig: Duncker & Humblot.
- 17) Wilhelm Jerusalem, 1926, *Einführung in die Soziologie*, hrsg. von Walther Eckstein, Wien und Leipzig: Wilhelm Braumüller, 特に Einleitung: Die Soziologie als Grundlage der Geisteswissenschaften, S.3-17, §1. Gegenstand der Soziologie, S.18-20 など。
- 18) Rudolf Stammler, [1896] 1906, *Wirtschaft und Recht nach der materialistischen Geschichtsauffassung: Eine sozialphilosophische Untersuchung*, 2. verbesserte Aufl., Leipzig: Veit & Comp, 特に 2. Buch, 1. Abschnitt: Soziales Leben der Menschen, S.77-111 など。
- 19) Hans Kelsen, 1925, *Allgemeine Staatslehre*, Julius Springer: Berlin, 特に 1. Kapitel: Staat und Gesellschaft (Staatslehre als Soziologie), S.3-26 など (= [1936] 1971, 清宮四郎訳『一般国家学』改訳版, 岩波書店, 特に第一章「国家と社会(社会学としての国家学)」3-44頁など。)
- 20) Gustav Ratzenhofer, 1898, *Die Sociologische Erkenntnis: Positive Philosophie des socialen Lebens*, Leipzig: F. A. Brockhaus, 特に II. Die psychologische Grundlage der Sociologie, S.20-83 など。(= 1923, 宮崎市八訳述『社會學的認識論』新潮社, 抄訳・解説。)
- 21) Albion W. Small, 1905, *General Sociology: An Exposition of the Main Development in Sociological Theory from Spencer to Ratzenhofer*, Chicago, Illinois: University of Chicago Press, 特に Part IV (An Interpretation of Ratzenhofer), Chapter 14. Elements of the Social Process, Chapter 15. The Nature of the Social Process, Part VI, Chapter 31. Interests, pp.196-206, 425-442 など。(= 1925, 高島素之訳述『社會學思想の人生的價值』新潮社, 抄訳。)
- 22) Rudolf Eisler, 1914, *Der Zweck: Seine Bedeutung für Natur und Geist*, Berlin:

- Ernst Siegfried Mittler und Sohn; 同, 1917, »Das Einheitsprinzip der Erkenntnis«, *Annalen der Naturphilosophie*, 13: 275-304.
- 23) Ludwig Stephinger, 1921, »Zur Grundlegung der Gesellschaftswissenschaft«, *Kölner Vierteljahrshefte für Sozialwissenschaften*, Reihe A: *Soziologische Hefte*, 1 (3): 16-27.
- 24) 注 6、16 の文献 (Wiese 1924, 1929) を参照のこと。
- 25) 注 10 に挙げたフィアカントの文献 (Vierkanth 1928) の Einleitung, 1. Gegenstand und Gliederung der Soziologie, S.1-13, 特に S.6-12 を参照のこと。同書初版 (Vierkanth 1923) には「文化社会学 (Kultursoziologie)」の項目が見られず、その間の議論の発展が想定される。
- 26) 社会誌については、文献一覧の Tönnies (1925: 15 ほか)、また本辞典同項目 (Rudolf Heberle, 1931, »Soziographie«, Alfred Vierkanth (Hg.), *Handwörterbuch der Soziologie*, Stuttgart: Ferdinand Enke Verlag, 564-568) やそこで挙げられている諸文献などを参照のこと。
- 27) 注 10 の文献 (Vierkanth 1928) より。「そうした特定の〔社会の歴史的な〕諸形態に対しては、社会の特定の類型をそこに認めることで、体系的な観点から考察することができる。…その際には確かに、社会学の帰納的拡張工事のための素材を得ることができる」(S.4)。
- 28) Theodor-Wilhelm Danzel, 1928, *Prinzipien und Methoden der Entwicklungspsychologie: Grundlinien einer psychologischen Entwicklungsgeschichte von Kultur und Gesellschaft*, Berlin und Wien: Urban & Schwarzenberg.
- 29) 「社会の社会学」と「文化社会学」の区別は、注 10、25、27 に挙げたフィアカントの著作 (Vierkanth 1928) に基づくと思われる。特に注 25 に挙げた序章 1 節、S.3-9 を参照のこと。「私たちは社会についての学説、つまり『社会の社会学 (Gesellschaftssoziologie)』から議論を始めることとしよう。社会の社会学はまず、社会一般 (社会の具体的な歴史的形態と対比される) を探究しなければならない」(S.3-4)。ちなみに注 25 で言及した「文化社会学」の項目と同様、「社会の社会学」も同書初版 (Vierkanth 1923) では登場していない (初版の文献情報は注 4 を参照)。
- 30) Max Weber, [1921] 1972, *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriß der verstehenden Soziologie*, besorgt von Johannes Winckelmann, 5., rividierte Aufl., Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1. Halbband, 1. Teil: Soziologische Kategorienlehre, Kap. III: Die Typen der Herrschaft, S.122-176. (= 1970, 世良晃志郎訳『支配の諸類

型』創文社。）

- 31) Lester F. Ward, 1903, *Pure Sociology: A Treatise on the Origin and Spontaneous Development of Society*, New York: Macmillan. (= 1924, 石川功訳『純正社會學』上巻, 新潮社); 同, 1906, *Applied Sociology: A Treatise on the Conscious Improvement of Society by Society*: Boston: Ginn. (= 1913, 伊藤輔利・葛西又次郎訳『應用社會學』大日本文明協會.)
- 32) Edward Alsworth Ross, 1920, *Principles of Sociology*, New York: Century.
- 33) Herbert Newhard Shenton, 1927, *The Practical Application of Sociology: A Study of the Scope and Purpose of Applied Sociology*, New York: Columbia University Press.
- 34) Rudolf Goldscheid, 1911, *Höherentwicklung und Menschenökonomie: Grundlegung der Sozialbiologie*, Leipzig: W. Klinkhardt.
- 35) Max Adler, 1925, »Soziologie und Erkenntniskritik. Einleitung zu einer erkenntniskritischen Grundlegung der Soziologie«, *Jahrbuch für Soziologie*, 1: 4-52.
- 36) Ludwig Gumplowicz, 1892, *Sociologie und Politik*, Leipzig: Duncker & Humblot, 特に3. Buch: Die Politik als angewandte Sociologie, §36. Sociologie und praktische Politik, S.103-104.; ラッツェンホーファーは注20に挙げた文献の特にI. Das Wesen der sociologischen Erkenntnis, 1. Die Aufgabe der Sociologie, S.1-7.
- 37) 注21に挙げた文献 (Small 1905 = 1925) を参照のこと。
- 38) Max Weber, 1904, »Die „Objektivität“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis«, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 19: 22-87. (= 1998, 富永祐治・立野保男訳, 折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店.)
- 39) Carl Brinkmann, 1919, *Versuch einer Gesellschaftswissenschaft*, München und Leipzig: Duncker & Humblot.
- 40) Karl Dunkmann, 1929, *Angewandte Soziologie: Probleme und Aufgaben mit besonderer Berücksichtigung der Pädagogik, Ökonomik und Politik*, Berlin: R. Hobbing.
- 41) 以下も参照のこと。Leopold von Wiese, 1920, »Die Soziologie als Einzelwissenschaft«, *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich*, 44(2): 31-51.
- 42) 「社会学シンポジウム (Soziologisches Symposion)」と題されたこの企画は『民族心理学・社会学雑誌』第5巻2号(1929年)から掲載が始まっており、

ガイガーが挙げた論者の他には、ウィリアム・F・オグバーン「文化社会学と量的方法」(William Fielding Ogburn, 1930, »Die Kulturosoziologie und die quantitativen Methoden«, *Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*, 6(3): 257-266)、ロバート・M・マッキーヴァー「社会学の対象と方法」(Robert Morrison MacIver, 1930, »Gegenstand und Methode der Soziologie«, *ibid*, 6(4): 385-398)、テンニース「社会学と私の関係」(Ferdinand Tönnies, 1931, »Soziologische Symposition IX« [Neu gedruckt in 1932 als »Mein Verhältnis zur Soziologie«], *ibid*, 7(2): 129-148)、リハルト・トゥルンヴァルト「機能的社会学」(Richard Thurnwald, 1931, »Funktionelle Soziologie: Die Gesellung als Vorgang und Ablauf«, *ibid*, 7(4): 385-400) が収録されており、同企画論文はすべて『民族心理学・社会学雑誌』が『ソシオロギス』(*Sociologus: Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie; A Journal of Sociology and Social psychology*)として新装されるのと同じ年に、以下の書籍に再録されている。Richard Thurnwald (Hg.), 1932, *Soziologie von heute: Ein Symposium der Zeitschrift für Völkerpsychologie und Soziologie*, Leipzig: C. L. Hirschfeld. (= 1944, 福武直訳『社会学の対象と方法』青山書院 [テンニースとブレンゲの論考を除く訳])。『民族心理学・社会学雑誌』と後継の『ソシオロギス』、またそれらの『ケルン社会学・社会心理学雑誌』との関わりについては、以下も参照のこと。Stephan Moebius, 2017, »Die Geschichte der Soziologie im Spiegel der Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie (KZfSS)«, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 69 (Supplement 1): 3-44, 特に10-11. (= 2018, 梅村麦生訳『ケルン社会学・社会心理学雑誌』にみる社会学の歴史』上『京都社会学年報』26: 123-147, 特に131-133)。

付 記

この翻訳は、JSPS 科研費 19K13912, 19H01585 の助成を受けた研究成果の一部である。